

“歴史的な中国新疆与中亜” 国際学術研討会参加報告

菅原 純、小沼 孝博

2010年8月19日～20日に中国新疆ウイグル自治区ウルムチ市の環球大酒店において、《新疆通史》編撰委員会・新疆ウイグル自治区社会科学院・中国社会科学院歴史研究所の共同主催による「“歴史的な中国新疆与中亜” 国際学術研討会」(International Symposium on the History of Xinjiang China and the Central Asia)が開催された。本会議は、本来2009年10月12日～14日に開催予定であったが、同年夏季にウルムチ市で発生した諸事件のあおりを受け、延期を余儀なくされていた。会期は1日短縮されたものの、あらためて開催の運びとなったのである。

18日のレジストレーションで配布された「会議指南」によれば、本会議は①歴史組、②文献研究・総述組、③考古・文化組の三つのセッションから構成され、参加者数は国内外からの参加者総勢約120名、報告者数は72名である。そのうち海外からの参加者は20名ほどで、国籍は日本、ウズベキスタン、カザフスタン、クルグズスタン、タジキスタン、インド、トルコ、ロシアからなり、欧米の研究者は皆無であった。日本人参加者は、②文献研究・総述組に参加した菅原・小沼と、③考古・文化組に参加した大澤孝氏(大阪大学)・西村陽子氏(国立情報学研究所)の計4名であった。以下、本会議の概要を紹介するとともに、そこで垣間見られたいくつかの問題について雑感めいたことを述べてみたい⁽¹⁾。

一日目の19日、メイン会場である「^{メディア・センター}多機能庁」において、自治区政府の「領導」も招いて開会式が開かれた。《新疆通史》編撰委員会主任の呉敦夫氏による開会の辞の後、自治区政府を代表して宣伝部長の李屹氏がウェルカム・スピーチをおこなった。また、清朝期およびヤークープ・ベク期の新疆史研究で著名であり、元外交官という経歴を持つA. Khodjaev氏(ウズベキスタン科学アカデミー東洋学研究所)が、参加者を代表して流暢かつ格式の高

⁽¹⁾ 本会議の全体に関わる参加報告としては、文献研究・総述組に参加した聶静洁氏(中国社会科学院歴史研究所)が中国語による報告を『欧亜学研究』のWebサイトに発表している。あわせて参照されたい。<http://www.eurasianhistory.com/data/articles/b01/2105.html>

い中国語でスピーチをおこなった。中国語でのスピーチは、通訳によってすべて英語に翻訳された。

以前に比べて少なくなったとはいえ、中国（特に地方都市）で開催される国際会議では、開幕式と閉会式は最も重要な「儀礼」であり、気合いの入ったものが多い。本会議の開会式は、まさにそのお手本といってよいほど、“完成度の高い”ものであった。その反面、のちに耳にしたところによると、以下のような一幕があったという。開会式である人物がおこなった挨拶の中で、新疆における「汎トルコ主義」の浸透に対する懸念についての言及があった。するとトルコからの参加者の一人が気分を害して退席したというのである。会議当事者たちにはそれに気づいた様子ではなかったが、トルコから複数のゲストを呼んでいながら、あまりにも不用意な発言であったと思われた。

いったん外へ出て記念の集合写真を撮った後、再びメイン会場にもどり、4名の研究者（うち2名は外国人）による基調講演がおこなわれた。最初に演壇に立った新疆社会科学院副院長の苗普生氏は、都市・宗教・言語・文物・移動をキーワードに「シルクロード」における諸民族・諸文明の「融化」の重要性を指摘し、いわゆる「文明の衝突」論に反駁した。のちに振り返ってみると、この苗氏の講演内容に主催者側の意図が集約されていた感がある。

一日目午後から二日目午前にかけては、会場を三つに分けて「分組討論」^{グループ・セッション}がおこなわれた。以下では、菅原と小沼が参加した②文献研究・総述組の概要をごく簡単に紹介することにする。

文献研究・総述組は、文献研究に関わる報告と、研究史・研究動向に関わる報告からなり、プログラム上では報告者数は外国人研究者7名を含む計21名であった。司会は、一日目は菅原、二日目は呉玉貴氏（中国社会科学院歴史研究所）が務めた。なお、司会の担当について、菅原には事前に何の相談もなかった。

各報告者の題目や報告内容について、全てをここで紹介することはできないので、文献研究・総述組の中で注目された報告をいくつかピックアップして紹介したい。Khodjaev氏（使用言語：中国語）は、ウズベキスタン所蔵の新疆歴史文献や研究の現状に関して詳しく紹介した。現在ウズベキスタンの若い世代の中には、新疆史はおろか、中国史の研究を志望する者がほとんどおらず、研究は岐路に立たされているという。上海復旦大学の博士生である邱軼皓氏（中国語）は、『五族譜』などペルシャ語史料に依拠したモンゴル帝国の系譜に関する報告であった。門外漢の我々には結論の妥当性は検証すべくもないが、東西文献を駆使した研究手法をとる若い中国人研究者の登場に、新鮮さと一種の驚きを覚えた。慶応大学に留学経験を持つトルコ・アンカラ大学のA. M. Dundar氏（英語）は、アブドゥルレシト・イブラヒムの旅行記『イスラーム世界』に見られる、中央アジア・中国・日本に関する情報を紹介した。会場から寄せられたイブラヒムの旅費の出所に関する質問について、日本の軍関係者の中にパトロンが存在した可能性が高いことを指摘した。魯迅美術学院の李勤璞（中国

語)は、大連図書館に所蔵される、ジャハンギールの反乱に関連する『剿平喀什噶爾奏摺』収録の7件の漢文奏摺について、全文テキストを示して公刊史料との比較をおこなった。小沼(中国語)は、台北故宮所蔵の1848年のコーカンド・ハン国外交文書2件を紹介し、文書から読み取れる用語・書式の特徴やパミール地域における当時の国際情勢について検討した。菅原(英語)は“Reconsidering the Religious Policy of Yaqub Beg”と題し、現在新疆に現存し公開されているヤークーブ・ベグ政権期のワクフ関連文書(発給者はヤークーブ・ベグ本人で、カシュガルのサマンにかつて存在した Khwāja Ishāq Walī マザールの管財人等の叙任に係る文書)ならびに大銅鍋(ヤークーブ・ベグ名でホタン地区の2座のマザールに寄進されたもの)の銘文を紹介し、これまでのヤークーブ・ベグ研究に補足的な知見を提示する報告を行った。

他の二つのセッションには、ほとんど顔を出すことができなかったが、考古・文化組では大澤氏と西村氏がそれぞれ報告をおこなった。最も参加者が多かった歴史組では、李琪氏(陝西師範大学)による中央アジア諸国のウイグル人に関する報告、乌云高娃氏(中国社会科学院歴史研究所)による元寇(第三次遠征)に関する報告、インドの A. Patnaik 氏(Jawaharlal Nehru 大学)によるインド・中央アジア関係に関する報告などが行われた。

二日目夕刻の閉会式では、三セッションの代表(秘書長)による各セッションの結果報告⁽²⁾と、王崇久氏による本会議の総括がおこなわれ、会議は「成功」を謳いつつ幕を閉じた。なお、一日目の夜は希望者を募っての「国際大バザール」見学、二日目の午後には外国人ゲストによる新疆ウイグル自治区博物館の見学がなされた。さらに会議に続く21日～24日には、ウルムチから天山南路の史跡を巡りながらカシュガルまでバスで移動する「^{エクスカーション}學術考察」が組まれていたが⁽³⁾、菅原と小沼はともに不参加であった。

本会議の正式のタイトルは冒頭に示したとおり「“歴史的中國新疆與中亞”國際學術研討會」といい、主催組織は《新疆通史》編撰委員会、新疆社会科学院、そして中国社会科学院歴史研究所の三団体となっている。これは要するに、中国の「官製新疆史」に関わるセッションが主催する国際学术会议ということになる。また、1年間の延期による仕切り直しの会議であっただけに、主催者側の意気込みを随所に感じさせた。主催の三団体、およびそれに所属し会議運営やサポートにあたられた関係者各位には、この場を借りて厚く御礼を申し述べたい。

⁽²⁾ 文献研究・総述組については、当セッションの代表であった李錦綉氏(中国社会科学院歴史研究所)が結果報告をおこない、その内容は『欧亚学研究』のWebサイトに掲載されている。www.eurasianhistory.com/data/upload/xinjiang2010.doc

⁽³⁾ 「學術考察」には天山北路を巡るルートも準備されていたが、こちらは中国人研究者のみの参加であった。

しかし、個別の報告と会議の運営方法については、些か物足りなさを感じたのも事実である。今後のことを思い、敢えて諫言を呈するならば、以下ようになる。

まずなによりも、事前の宣伝が不十分であったためか、会議全体の趣旨というものが不明瞭のまま本番に突入してしまった感がある。グループ・セッションにおいても、報告の順番に法則性がなかった。報告に対するコメントや質疑応答の時間は設けられておらず、セッションとしての「まとまり」を欠いたまま、各報告が冗長に繰り返されていった印象は拭えなかった。また文献研究・総述組では、研究報告の最中にもかかわらず、着席したまま雑談を続けている中堅・年配の研究者がいた。報告に熱心に聞き入る大学院生などの若い研究者が少なからずただけに、このような態度は残念でならない。

会議の趣旨に関していえば、会議開始以降、基調報告や個別報告の題目・内容から全体として「シルクロード」を通じた前近代の東西交渉・文化交流に力点が置かれていることは即座に感得できた。それ自体は悪いことではないのだが、一方で清代～近代の比較的新しい時代を研究する立場から見ると、新疆と中央アジアの関係を語る上で無視することができないイスラームに関わるトピックが、巧妙に回避されていた感が否めない。無論、昨今の新疆情勢と本会議の公的な性格を念頭に置けば、この傾向はむしろ当然のことなのではあるが。

かたや主催者側の立場に立って意図を汲むとすれば、本会議を中止せず、開催に至らせるには、様々な難問が立ちはだかっていたと思われる。たとえば、当初会場は新疆ウイグル自治区の人民大会堂の真向かいに位置し、自治区人民大会などの主要な会議の際は公式の宿舍となる崑崙賓館、通称「八楼」が予定されていた。本来であれば、本会議はかなり「破格」の位置づけにあったことが想定される。また会議名称も、去年は“歴史的○新疆与中○陝”であったが、今年も“歴史的○中国新疆与中○陝”に改められていた。このような変更点からは、新疆社会が置かれている難しい現状はもちろんのこと、なんとしても国際会議そのものは開催したいという主催者側の「意地」が透けて見える気がした。そのほかにも、主催者・参加者の数人との雑談の中からは、本会議が当初の計画や意図とはやや異なる形で開催の運びとなったことが窺えた。内心忸怩たる思いをかかえていた人もいたに違いない。様々な制約があったにもかかわらず、会議を開催にこぎつけ、我々に貴重な機会を提供していただいた関係者各位には、素直に敬意を表したい。

【附記】本稿の内容については、菅原がブログ上に発表した参加報告 (<http://molla.txt-nifty.com/essay/2010/09/post-f927.html>) と一部重複する部分があることを附言しておく。

(すがわら じゅん：東京外国語大学)

(おぬま たかひろ：東北学院大学)